古市公威の偉さ（5）

金関義則

土木学会の昭和五三年度全国大会が九月に仙台で開かれ、私も研究討論会の話題提供者として「土木史における古市、沖野の時代」を報告した。そのとき訴えたかった要旨は次のようなものであった。

外交史では大隈重信の時代、陸奥宗光の時代といわれ、また財政史では松方正義の時代、高橋是清の時代といわれることがある。土木史の大きい潮流をとらえるために、古市公威の時代、沖野忠雄の時代という考えをもちこんで考えてみたい。

古市も沖野も一八五四年（安政一年）に生まれ、それぞれ明治八年、九年から一三年、一四年にかけて、すなわち五年間フランスに留学し、帰国してから内務省土木局で大きい業績を残した。古市、沖野の還暦を記念するかのように一九一四年（大正三年）に土木学会が結成された（詳細は『土木学会誌』一九七五年一月号の金関義則「古市公威と土木学会の設立」を見て頂きたい）。古市は八〇歳で一九三四年（昭和九年）に輝かしい生涯を閉じるが、この年は土木学会創立二〇周年にあたる。今から四年前の一九七四年に土木学会は還暦を迎えたが、古市、沖野にとっては生誕一二〇年にあたる。さらに土木学会は一九七六年一一月に古市公威について、また一九七七年一一月に沖野忠雄についてシンポジウムを開催したので、古市、沖野への関心も高まり理解も深くなろうとしている。

さて古市公威の時代、沖野忠雄の時代を考える根拠として、内務省土木局の歴史を探りあげる。土木局で働いた主要職員を表示してみると、古市や沖野が指導的な役割を果たした時期が浮かびあがってくる。古市は明治一三年に、また沖野は一六年に土木局に入ったが、このころまでにアメリカ帰りの宮之原誠蔵、ドイツ帰りの田辺義三郎、イギリス帰りの石黒五十二、東京大学卒業の清水清、岡胤信、小柴保人、腰塚英、日下部弁二郎、近藤仙太郎、工部大学校卒業の小林八郎、佐

伯敦崇、飯塚義光、香取多吾、江森盛孝、高田雷太郎、伊藤陸三郎、宮城島庄吉、山口準之助、上山甚も入っていた。明治一八年一二月に太政官制から内閣制度へ変わり、一九年七月には土木監督署、巡視長という体制が始められた。この新しい体制は内務大臣として手腕を振るった山県有朋の求めにこたえて、古市が提起したものであった。古市は一九年五月から発足したばかりの帝国大学で工科大学教授兼学長となり土木局は兼務となった（一七年三月から担当していた信濃川、阿賀川、庄川などの改修工事の監督は沖野忠雄に引きつがれた）。

明治二一年一一月から二二年九月にかけて、古市は内務大臣の山県有朋（陸軍中将、二三年六月に大将進級）のヨーロッパ視察に随行し、望外の業績をあげた（『みすず』一九七四年六月号、七月号の金関義則「古市公威の偉さ(1)、(2)」を参照して頂きたい）。山県は古市を二三年六月、土木局長に抜擢し、工科大学教授兼工科大学長は兼務となった。このころまでに山田貫吉は退官して民間企業に移り、宮之原誠蔵、田辺義三郎は病気で倒れて土木局から消え、石黒五十二が第一区、第二区、第三区土木監督署を、沖野忠雄が第四区、第五区、第六区土木監督署を掌握するようになり、明治二四年からは第一区から第六区までの土木監督署長に石黒、小林、小柴、沖野、日下部が顔をそろえ、いつ河川法が公布されても対応できる陣容が整った。日清戦争で勝利し、二九年三月に漸く河川法が国会を通過し、河川改修の高水工事が積極的に推進されるようになる。

しかしながら古市は大隈重信の内閣が成立するや、明治三一年七月に内務大臣の板垣退助の止めるのを振りきって土木技監兼土木局長を辞任してしまう。同じ日付で工科大学教授兼工科大学長をも辞任する。それは日露戦争に備えて、京城釜山鉄道を建設しようという念願からの決断であったと考えられる。古市は古市の去ったあとを考え、松方正義内閣のときに監督署技監を新設して沖野、石黒を就任させたが、大隈内閣は倒れる直前にこの監督署技監を廃止した。石黒も日露戦争に備えて海軍技監となり、古市に先んじて土木局を去ったので、沖野がおのずと土木局の首座となった。しかしながら古市に与えられた土木技監という肩書を、政府は沖野に与えようとしなかった。しかも沖野は手がけている淀川改修、大阪築港を固執し、上京して中央から全国の土木事業を指導する役割をになおうとしなかった。

明治四四年四月に沖野は内務技監となり二二年という長い歳月をすごした大阪を去って東上する。これは四三年八月に利根川、北上川などで起こった未曾有の大氾濫をきっかけとして、従来の治水事業が根本的に検討され、初めて全国的な長期の治水計画に着手せねばならないという要請に応ずる緊急人事であった。まさに沖野忠雄の時代の開幕というべきであろう。日露戦争の前後は軍事費がふくらみ、土木事業にまわされる予算は削られがちであった。しかしこの間に、沖野は他日に備えて、人材の育成、技術の改良にいそしんでいたから、内務技監として執務したのは七年ばかりに過ぎないが、沖野の去ったあとは後顧の憂いがなかった。大正六年九月の淀川破堤さえなければ、沖野はもっと長く内務技監として陣頭指揮したであろうというものもあるが、常に精魂を尽くして職務に励んだ沖野としては、土木局の陣容が充実し国民の期待どおりに活動できる状態に達したと判断して退官したように思われる。

沖野が退官して神戸に隠棲したあと、沖野の育てた後継者は沖野の期待に背かぬよう努力した。それ故に沖野忠雄の時代は、沖野の退官と同時に終ったということはできない。

私に与えられた時間が短かかったので、前回（『みすず』一九七八年九月号）に掲載した三葉の図表を中心に、どのように時代の移り変わりを捉えるかを、極めて簡略にまとめるよりほかはなかった。私は一九七〇年五月に日本科学史学会の「日本科学技術史大系」の第一六巻『土木技術』を刊行したが、あきたらない点については補足し改訂しようと心がけてきた。土木学会で「土木史における古市、沖野の時代」を報告することによって、『土木技術』の全面的な補足、改訂の枠組を築く糸口をつかむことができた。それは文字どおりの糸口で、これからの作業が大変である。しかも、古市、沖野の業績を追究して内務省土木局の歴史を描きなおしつつ、それと平行して河川、港湾だけでなく、道路、鉄道、都市、水道など、土木史という大海を流れる幾つもの潮流を読みとらねばならない。しかしながら私にとっては、農商務省、商工省の鉱山局の歴史を調べるという困難な作業に比べれば、内務省土木局はなんとかなりそうに考えられる。内務省史に比べ農商務省史、商工省史のほうが、研究、調査が格段に進んでいるにかかわらず、なんとかなりそうに考えるのは古市、沖野が長期にわたって強い指導力を発揮したためである。古市の生涯にとって土木局における活動は業績の全てではなく、それ以外の多彩な活動も見すごすことはできない。それらは土木局における活動に比べ捕捉がより困難である。それから沖野の着手した河川、港湾、道路などの土木事業は、沖野の退官したあとも、次々の後継者によって拡げられているから、沖野の広汎な業績も沖野以前、沖野以後と対照して評価せねばならない。たしかに淀川改修、大阪築港について沖野の役割を論ずることは資料も豊富で不可能でないが、利根川、荒川になると沖野の業績を確定することすら非常に困難である。東京にせよ、大阪にせよ、世界史上にも類例のない巨大都市が成立する基盤を、どのように古市や沖野が用意したか。それを解明せずに、現況に対する不平や不満を並べたてても結局は無為無策に終るであろう。

これまで主として古市公威そのもの、沖野忠雄そのものをみつめて論議してきたが、土木局の歴史、内務省の歴史という広い視野に立つことにも心がけることにした。その後の調査によって、判然としたこと、訂正すべきこともあるので、多少の重複をいとわず筆を進めてみよう。

明治一〇年一月に西郷隆盛の反乱がおこったとき、大蔵大輔であった松方正義は病気だった大隈重信の大蔵卿に代わって財政の責任を負わねばならなかった。やがて反乱が鎮圧され、かねてヨーロッパ視察を希望していた松方は、勧農局長となっただけでなく、フランス万国博の副総裁（総裁は内務卿の大久保利通）としてパリに出かけることができた。それは西南の役の論功行賞といえるが、この機会に松方が政治家として大きく伸びることを大久

保は期待していた。松方が首尾よく任務を果たして明治一二年三月に帰国したとき、暗殺された大久保の後を継いで伊藤博文が内務卿になっていた。松方が先輩の大久保の遺志を継いで殖産興業にはげむのを、伊藤は喜こびとそすれ妨げはしなかった。さらに伊藤は大久保を失なったあとの政府を強化するため、一三年二月に参議が卿を兼任することを改め、卿の顔ぶれを一新した。このとき松方は内務卿となり、より積極的に殖産興業を推進することになった。フランスから帰国した古市公威だけでなく、東京大学を卒業したばかりの岡胤信、小柴保人、腰塚英、日下部弁二郎が一三年一二月に採用されたのは、土木局が始まって以来の異変であった。もし松方がパリに出かけ、エコール・サントラルで優秀な学生であった古市公威に会わなかったら、いかに土木局長の石井省一郎が熱願しても、このように多数の新卒採用は断行できなかったであろう。

古市といっしょにエコール・サントラルを卒業したあと、沖野忠雄、山口半六はなお二年間フランスにとどまって建築、土木の実地研修をつづけた。五年間の留学を終えて帰国したが、沖野は一四年一〇月に東京職工学校に、また山口は一五年一月に郵便汽船三菱会社に就職した。山口は古市、沖野に比べて、芸術的感覚に傑れていたから民間で手腕を発揮したかったのであろう。沖野は親友の山口と性格もちがい民間志向ではなかったから、先に帰国して官途についた山田寅吉、古市公威の動静をうかがいつつ、独自の進路を模索していた。そのころパリ万国博を視察した文部大輔の九鬼隆一、教育博物館長補の手島精一は、工業教育の必要をいよいよ痛感して帰国した。専門学務局でも局長の浜尾新、次長の安東清人が、やはり工業教育に深い関心をいだいていた。安東は熊本藩出身の貢進生で、古市と同じく明治八年から留学し、フライベルクで鉱山学を修得していた。九鬼を中心に討議が重ねられ、ついに文部省は工業教育を専門とする学校の開設を決定した。明治一四年五月に発足した東京職工学校がそれである。その校長に就任することになった正木退蔵が、九年から一四年にかけてヨーロッパ留学生の監督をしていたので、成績優秀な留学生から新設学校の教官を選ぶことができた。明治九年の文部省留学生だった沖野忠雄、谷口直貞と、福岡藩主派遣の私費留学生だった平賀義美が東京職工学校教諭に任命されたが、正木からも九鬼からも最も多くを期待されたのは沖野であった。

正木退蔵は明治三年から七年にかけてロンドン大学でウィリヤムソン教授（有機化学）に師事し、ウィリヤムソン門下のアトキンソンをつれて帰国した。アトキンソンが東京開成学校、東京大学で化学専攻の学生を教育する最初の教師として果した功績はどんなに大きく評価しても大きすぎないであろう。さらに一一年に正木は東京大学の機械工学教師としてユーイングを招いており、東京大学理学部、工芸学部の充実に貢献している。人材発掘にかけて自信のあった正木は、エコール・サントラルでこつこつと工学教育一般を学んだ沖野を校長後継者と考えていたようである。フランスでは立身出世のエリート・コースとしてグラン・ゼコール Grandes Ecoles と呼ばれる名門校ができあがっており、古市や沖野が入学したエコール・サントラル Ecole centrale des arts et manufactures はエコール・ポリテクニク Ecole polytechnique とともに伝統を誇るグラン・ゼコールのなかでも指おりの名門校であった。はげしい競争試験を突破して入学し、グラン・ゼコールを優秀な成績で卒業した青年がやがて立身出世して最高の地位につけるという慣習は、ドゴール退陣以後の学制改革でも変わることなく続いている。薩摩藩出身の松方正義がエコール・サントラルを卒業した山田寅吉、古市公威を内務省に採ったあとだけに、長州藩出身で吉田松陰、木戸孝允の遺志を継ぐ正木としては、沖野だけは文部省に繋ぎとめたかった。沖野とともに正木に見こまれた谷口直貞、平賀義美は、それぞれ郡山藩、福岡藩の貢進生であった。谷口はグラスゴー大学で機械工学を、平賀はマンチェスター大学で染色化学を修め、さらに実地の経験を積んでいた。

職工学校は校名からみて職工を養成するように考えられがちであるが、実際は職工を教育する学校の教師や職工長、工場長を育成する機関であった。教諭の俸給も東京大学の教授なみであったし、一九年四月から二〇年一〇月まで帝国大学に移管され教諭は工科大学教授に任命された。ともあれ東京職工学校は予科一年、本科三年ということで、機械工芸科、化学工芸科あわせて六〇名を募集した。文部省は熱意をもって多年の懸案を実現したわけであるが、折角の趣旨はよく理解されなかったようで、工部省の工部大学校のように勉強熱心な生徒が入ってこなかった。沖野は明治三年に豊岡藩から選ばれて貢進生として上京し、フランス人のフランス語による講義に悩まされたことを偲び、外国のどこにも負けない充実した教科内容を日本語で授けようと努力した。ところが工業教育に情熱を燃やせば燃やすほど、生徒は講義の程度が高すぎる、進度が速すぎると非難して当惑させた。寄席の講釈をひやかす粋人でもあるまい、これが国立学校を志願した生徒かと、失望した沖野はやるだけやって教職を断念した。一六年七月から内務省土木局に移ってからも、沖野は好学、探究の意慾あるものしか、身辺に近づけようとしなかった。明治三五年に大阪で、沖野は平賀義美、岡胤信とともに関西商工学校を設立するが、校長となった平賀がどんなにすすめても講義を引きうけようとしなかった。つとめて社交と華美をしりぞけ、しばしば勉強熱心な学生、生徒に奨学金を贈るのが、何よりの愉しみとなっていた。

沖野が文部省で働いた期間は短かったが、校舎の営繕を誠実に担当した。土木局で使用する建物は全て簡素なもので満足しており、フランス仕込の腕前を誇示するような建築を残そうとしなかった。夏は現場より暑く、冬は現場より寒いという庁舎で、沖野は黙々と執務しつづけた。土木事業に心血をそそいだ沖野には、暑い寒いは怠けものの泣きごとと思われた。仕事よりもゴルフや

マージャンにうつつをぬかす土木技師が輩出するような時代になったが、それは沖野が粉骨砕身した当時を忘れて顧みなくなった底ぬけの退廃にみあうものであろう。

沖野とちがって古市は迷うことなく土木局に腰を落ちつけ、与えられた仕事を次々に処理したから、その才能、識見は早くから認められた。明治一六年に山田寅吉、沖野忠雄、石黒五十二が土木局に入ってきても古市の声望はゆらぐことなく仕事に打ちこみつづけた。一八年一二月に太政官制から内閣制度に移行し、諸事一新ということになり、新しく発足した帝国大学の工科大学に教授兼学長として迎えられた。東京大学の工芸学部に、かつて工部省に所属した工部大学校を合併して、高い水準の工科大学を創設する学長として、古市のほかに適任者がなかった。しかし内務大臣の山県有朋は、古市を土木局から手ばなすことができなかった。山県はすでに古市の献策を受けとめて、全国を六地区に分けて土木監督署を一九年七月から発足させたから、それらが円滑に動くようになるまで古市に土木局兼務を命ずることにした。土木局長は明治一〇年一月から石井省一郎、一七年二月から島惟精、一七年一二月から三島通庸、一九年四月から西村捨三と代わったが、土木局の体制刷新は近代的な土木工学に不案内な事務系、法科系の豪傑には歯がたたなかった。西村は誠実で有能な古市、沖野に依りかかるよりほかはなかった。新設された土木監督署の巡視長に山田寅吉（第二区、第一区）、沖野忠雄（第三区）、宮之原誠蔵（第四区）、田辺義三郎（第五区）、石黒五十二（第六区）が配置されたが、最年長の宮之原が二二年に四二歳で、最年少の田辺が二三年に三〇歳で病没した。また山田も二一年まで土木局に在籍したように記録されているが、巡視長として執務した形跡はない。大倉喜八郎が藤田伝三郎と協力して有限責任の日本土木会社を設立し、山田を技師長に迎えたからである。会社は二〇年三月に発足したといわれるが、大倉、藤田はすでに一九年三月から琵琶湖疏水に、同年一二月から佐世保軍港に着工しており、そのほかにも獲得した鉄道工事があり、これらについて山田は参画していることを自ら認めている。従って二三年八月に山県が古市を抜擢して土木局長とし、二四年八月に古市が石黒五十二（第一区）、小林八郎（第二区）、小柴保人（第三区）、沖野忠雄（第四区）、日下部弁二郎（第五区）、岡胤信（第六区）という陣容を堅めるまでは、土木監督署では落ちつかない過渡期がつづいた。この間に退官して日本土木会社に移ったのは山田寅吉だけでなく、工部大学校土木科卒の杉山輯吉、太田六郎、江森盛孝、高田雪太郎、香取多喜、山田市太郎、大島仙蔵、野辺地久記、笹井愛次郎、渡辺嘉一、河野天端、宮城島庄吉、久米民之助、小川東吾、機械科卒の岡実康、造家科卒の新家孝正、鳥居菊助、船越欽哉、さらに東京大学、帝国大学の土木工学科卒の三浦健、鳥越金之助、岸金三郎、野口条馬も加わった。これらのうち江森、高田、香取、宮城島は土木局職員からの転出であった。当時は大学卒業で実地経験のあるものが多くなかったから、日本土木会社が抱えこんだ土木、建築技師の陣容は眼をみはらせるに十分であった。獲得した工事は皇居の表御座所、歌舞伎座、帝国ホテル、名古屋鎮台、東京湾海堡、利根運河、国鉄東海道線など、万能ぶりを発揮したが、やがて競争入札制度が実施されて受注減少し二五年一二月に日本土木会社は解散となり、二六年一一月から大倉喜八郎個人が経営する大倉土木組が発足するが、これは現在の大成建設の前身というべきものである。山田寅吉にとって日本土木会社は土木局よりも働きがいがあったと思われるが、まもなく退社して二二年から個人で土木請負を開始した。ほとんど同年といってよい古市、沖野、石黒とは、もともと同じ官庁に収まる人物ではなかった。なお山田の跡を追うように日本土木会社から独立して、新しく企業を起こすもの、新しい会社に招かれるものが続出した。

ついに企業慾を抑えきれず官僚の枠からはみだした山田寅吉に対し、二七歳で巡視長の大役をになった田辺義三郎は全力をあげて土木局の作業に精励した。ドイツで修得した技術を惜しみなく展開し、フランスで学んだ古市、沖野も、これからはドイツの工学教育だと認識を改めるようになった。しかしながら土木局から姿を消した宮之原誠蔵、山田寅吉の跡を次々に引きついで始末するうちに、体力に恵まれなかった田辺は健康を損じて早世したのであった。宮之原は薩摩藩、山田は小倉藩、沖野は豊岡藩出身であり、田辺義三郎と小林八郎は山県有朋と同郷の長州藩であり、田辺の前途は洋々たるものがあったにもかかわらず、その病没は余りに早すぎた。従って田辺に関する資料を見つけることは絶望的で、もしあるとすれば親友の原田豊吉関係をたどるほかはないであろう。原田も早世し、豊吉の長男の熊雄が祖父の原田一道男爵を継ぎ、祖父と親しかった西園寺公望の側近となっているから、田辺を探究する途が全くないわけでもない。

土木局の技師として最も古参であった宮之原誠蔵は、第四区の巡視長に任命され、明治一九年から二二年にかけて淀川、木曽川の治水を担当したはずであるが、そのような形跡が私には一向につかめない。宮之原は一七年七月に沖野、石黒、田辺とともに四等技師になり一九年五月に三等技師になっている。一四年から一八年にかけて、群馬県と新潟県とを結ぶ清水越新道の開削に携わり、その完成が天聴に達し縮緬代金一五〇円を下賜されたという記録が残っている。谷川連峯の腹を縫うように走る清水越新道は、路幅が三間で三五万円の巨費を要したにもかかわらず、幾度も雪崩でやられ廃道になってしまった。宮之原と同じく薩摩藩出身の三島通庸は、山形県、福島県、栃木県の県令として道路建設にいそしんだから、自由民権運動を弾圧する鬼県令と罵られると同時に、道路県令の異名もつけられた。明治九年から一三年にかけて栗子トンネルを掘削して山形県と宮城県を結ぶ新道を完成したが、翌年一〇月に明治天皇の巡幸を迎えて開通の式典をあげ、万世大

路と命名した。開けゆく国の為とて今日もまた亜ねて越ゆる栗子山かな、と歌った三島通庸の眼中には、もはや藩主の島津一族や西郷隆盛の面影もなかったであろう。さらに一五年から一七年にかけ、三島は福島県会と県民の抵抗を踏みにじって、会津若松から新潟県、山形県、栃木県へ至る三方新道の建設を強行した。やがて土木局長、警視総監を歴任して二〇年には子爵を授けられ、もし二一年に病没しなければ樺山資紀、高島鞆之助、大浦兼武など武断派の先頭に立って民党退治に突進したであろう。それに引きかえ、土木局の現場に埋もれて働いた宮之原誠蔵は、病み疲れて郷里でひっそりと他界したのか、その晩年の消息を語るものはいない。私は利根川の上流を歩くとき、清水越新道と悪戦苦闘した宮之原の姿が浮かんできて、胸がつまりそうになる。上越新幹線、上越高速道路、沼田ダムといった巨大開発構想を夢みる人々にとっても、廃道となった往年の清水越新道を望みみて不幸な先輩を偲ぶことは、無駄な感傷とはならないであろう。

明治一八年の水害は、低水工事から高水工事への転換を求める気運を、にわかに盛りあげた。高水工事を推進する河川法案は、漸く二九年三月になって国会を通過した。その年は激しい水害が重なり、内務省土木局は総力をあげて重要河川の高水工事と取組まねばならなくなった。古市の深慮遠謀が開花し結実する時が到来したのであった。利根川では近藤仙太郎が明治一六年から大正二年にかけ三〇年間、北上川では小林八郎が明治二四年から三八年にかけ一四年間、信濃川では小柴保人が二四年から四四年にかけ二〇年間、木曽川では原田貞介が二九年から四〇年にかけ一一年間、淀川では沖野が二二年から四四年にかけ二二年間という長い月日を改修工事で明け暮れたことは、ただただ壮観と言うほかはない。

古市は河川法成立と同時に、土木局で果たすべき役割を果たしたとして後進に道を開く準備にかかった。三〇年六月に沖野忠雄、石黒五十二が土木監督署技監になり、さらに石黒は三一年一月に海軍技監となり土木局を去った。古市が引退すれば後継者は沖野をおいて適任はなく、しかも土木局の技師はことごとくが現場で沖野の部下として鍛えられたもので堅められていた。内務大臣の板垣退助が慰留したにもかかわらず三一年七月に古市が土木技監兼土木局長を辞任したとき、内務次官の鈴木充美は旧改進党に対して旧自由党の利益を代表し、自ら土木局長を兼任し、土木技監も監督署技監も廃官にしてしまった。沖野は古市に代って土木技監となることなく、第五区監督署の署長にとどまった。ただし古市が土木局長として奔走して宿願の大阪築港事業が国会で認められ、三〇年七月に大阪築港の事務所が開設され、所長にはかつての土木局長、大阪府知事だった西村捨三が、また工事長には沖野忠雄が任命されたから非常に忙しくなっていた。沖野としては大阪にとどまって、淀川治水、大阪築港に全力を注ぐことは本望であった。上京して土木局の首座を占めても、党利党略で動く鈴木充美（自由党）が内務次官になり鳩山和夫（改進党）が外務次官になるような政党内閣では、長期の計画を貫くことは困難であった。このような情勢を見ぬいていた古市は、沖野、石黒の将来について出来る限りの配慮をして退陣したように思われる。古市が土木局を去り、土木技監が廃官となり、法科系の土木局長が牛耳をとるようになっても、沖野以下の土木技師は沖野を中心に結束して動揺したりはしなかった。内務大臣、内務次官、土木局長は沖野を無視して、自由自在に土木行政を動かせなかったからである。

明治四四年四月に沖野忠雄が内務技監となって上京するまで、古市の去った土木局には技師集団の棟梁がすわっていなかった。この一三年間について、詳細を解明することはまだ容易でない。古市は日露戦争に備えて京城釜山鉄道の速成に心血をそそぎ、戦後は朝鮮の幹線鉄道網を軌道にのせ、さらに大所高所にたって未来を遠望していた。すなわち古巣の土木局に出かけて懐古談議をたのしむような隠居趣味に、全く背を向けていた。沖野は毎週三日ずつ隔日勤務で淀川改修と大阪築港の陣頭にたち、日露戦争による工事遅滞をはねかえすことに精根を尽くした。三一年から四四年にかけて、明治後期といわれる時代を古市、沖野が育てた技師について、どのように働いたかの個別調査はまだまだ十分でない。しかしながら明治前期、中期の歴史について大筋をつかめば、後期の細かい解明も進展するであろう。

早々に土木局を去った山田寅吉のように、日露戦に際して京城釜山鉄道、京城義洲鉄道建設の現場に出かけた場合などは、その前後や周辺をたどっていくことも不可能でない。しかし山田のように出世しないで土木局を去った人々の動静はつかみにくい。例えば土木局長の石井省一郎とともに野蒜築港で働きながら、やがて石井と衝突して土木局を去った早川智寛について、その生涯の全体はまだとらえられていない。石井も早川も山田も、みな小倉藩出身であるが、陸軍で栄進した小沢武雄、奥保鞏、小川又次や、武よりも文で名声をあげた末松謙澄、堺枯川ほどに、郷党から関心を寄せられていない。石井は土木局長から岩手県令、岩手県知事を歴任している。早川は明治四年に土木寮に入ってから府県土木を手がけただけでなく、早川組を興し企業の才腕も発揮し、さらに仙台市長としても業績をあげた。

父（豊前国宇佐郡長洲の庄屋）の遺志をつぎ私財を投げだして広瀬井堰を完成し、日田県令の松方正義に認められて明治九年に土木寮に迎えられた南の場合も、明治をどう生きぬいたか、その評価は定まっていない。南は安積疏水、那須疏水、琵琶湖疏水、天竜川治水などで土法をもって貢献しながら、余人の功名手柄の陰に押しやられがちである。琵琶湖疏水では田辺朔郎だけが英雄視され、安積疏水では善玉の中条精一郎に対して悪玉の親方に仕立てられるという始末である。土木技術も土法がすたれ近代的な洋法が支配的となり土木監督署が発足するや、南は土木局を去っ

て国鉄の現場に移った。東北地方の鉄道建設で南の気質、技倆は、国鉄の父といわれる井上勝から高く評価された。井上は大久保、松方に代わって南を引きたてた。二五年に退官して田園に隠れようとしたときも、請負業をやれと激励して餞別を贈った。南は現業社を興こし鉄道工事を請負ったが、部下に仕事をとるために社主となったものの往年の意気はなかった。

これらのことを振りかえりながら、私は仙台の土木学会年会で「土木史における古市、沖野の時代」を論議した。仙台で最後の学生生活を送ったのは、もはや四〇年も昔のことで、その頃は仙台で学生生活を送った父の友人が幾人も健在であった。あの頃ならば、石井省一郎、早川智寛、山田寅吉、南一郎平のことも調べやすかったろうと、悔まれてならなかった。仙台ばかり見ていては東北は判らないとばかりに、背薬神社の神主や瑞巌寺の学僧が喜んで案内してくれた。学生時代の思い出はとめどないが、なお過ぎさったばかりの最近一〇年の月日もあきらめきれないものがあった。昭和四二年から四三年にかけ、土木の長老を次々に訪ねて取材し、雑誌『自然』一九六八年七月、八月、九月、一〇月、一一月、一二月号に「マンモス国土開発の展開」を執筆した。そのころ内務省史を編纂していた高橋嘉一郎からだしぬけに、明治時代がよく判らない、特に古市、沖野、山田、石黒、宮之原、田辺について判っていることを知らせてほしいと、依頼の葉書が届いた。直ちに電話で打合わせたが、四三年一〇月に脳出血でなくなったため、ついに面談の機会もなく助力できなかった。高橋は自らの履歴を述べて、いっしょに土木史探索をやろうと意気ごんだ。仙台一中、二高、東大土木と学び、大正五年七月から昭和二〇年四月まで土木一筋に働きぬき、仙台土木出張所工費課から初まって、国土局港湾課長、大阪土木出張所長を歴任した。さらに引退してから淀川九〇年史の編纂を手がけており、もし協力できれば一気に多くの成果があがるという見幕であった。しかしながら高橋のなくなったあと、私は単独で探索をつづけてみて、土木史の基本的資料は早くから失われてしまっていることを次々に確認する仕儀となった。もし私の「土木史における古市、沖野の時代」を、高橋が元気で聴いてくれたら、どんな批評を下したであろうか。義理と人情に厚かった高橋の温顔をなつかしまずにいられなかったのである。北上川周辺の何処を歩いても、もはや小林八郎を語る人に行きあうことは不可能である。高橋が初めて北上川の現場に立ったときは、小林が去ってから一一年ばかりたっていた。高橋が北上川を離れて新潟に移ったのは大正一三年一一月で、小林がひっそりと東京で息を引きとったのは一二年一二月であった。いまでは明治三八年以後の小林八郎の業績は天龍川疏水事業のほか判らないが、昭和四三年の時点で高橋と協力できたとしても、やはり判らなかったのではないか。判らなくともよい、協力できたら高橋の晩年をより愉しいものにできたであろうと、それだけが悔まれたのである。